

茨木のり子の詩人としての人格の形成

— 豊かな感受性から軍国少女へ、死の意識から対話の希求へ —

熊谷 誠人

キーワード… 茨木のり子 人格 自分の感受性 対話 わたしが一番きれいだったとき

はじめに―茨木のり子の詩人としての人格の形成―

吉本隆明氏は茨木のり子の詩を「言葉で書いているのではなくて、人格で書いている」と評した。その茨木の詩人としての人格がどのように形成されていたのかを述べてみたい。

二〇二二年五月に東海三県のNHK総合テレビで「わたしたちの茨木のり子」対話^①のメッセージ^②という、詩人茨木のり子の特集番組が放映された。番組のねらいは「彼女の詩人としての人格形成の場となったふるさと・愛知県での戦争体験や家族の影響をひもとく」ことにあるという。このことは私自身が、本会誌の一〇五・一一〇・一一三・一一四号の拙稿で触れてきたことであつた。私も番組に参加し、茨木のり子の母校にあたる愛知県立西尾高等学校で二時間続きの特別授業を行った。

その授業のための準備として、敗戦に至る茨木のり子の様相を通史的にまとめ直すことになった。茨木の西尾時代のことを高校生にわかりやすく伝える必要性から、茨木のり子の少女期^③をA西尾尋常高等小学校時代・B西尾高等女学校時代・C帝国女子医学薬学専門学校時代の三期に分け、彼女が書いたエッセイや詩を読みながら当時の時代背景を織り込んで茨木のり子について考察する、という授業を計画した。このように茨木の小学校時代から専門学校時代に至るまでの少女期を一貫して考察したのは、私にとっても初めてのことであつた。この作業を通して見えてきたのは、ABCのそれぞれの時期の〈違い〉であつた。戦前の茨木については、エッセイ「はたちが敗戦」の茨木自身の語りを引用して「茨木は軍国少女だつた」と言われることも多いが、彼女の少女期は「軍国少女」という一言でまとめてしまうにはあまりに

多様なものがあつた。むしろ、Aの小学校時代、Bの高等女学校時代、Cの専門学校時代を分節化し、それらの違いに着目しながら（一人の人間が変容・成長する姿）としてとらえることが、彼女を深く理解することにつながることをわかつた。そして（AからBへ、BからCへ）という茨木の変容を解釈することは、後に詩人となつた茨木のり子の人格がどのように形成されていったのかという大きなテーマに答えることにもなると考えられた。このような茨木の少女期の全体像をつかむことができたのが、今回の番組制作に関わつた収穫であつた。

以上のことを踏まえ、本稿では茨木のり子が少女期に西尾において経験した原体験を通して、彼女の詩人としての人格が形成されていった様相を明らかにする。その目標に沿つて、茨木のエッセイや詩を時代背景に照らし読み解き、彼女の内面についての考察を加える。具体的には、以下の第一章でA西尾尋常高等小学校時代について、第二章でB西尾高等女学校時代について、第三章でC帝国女子医学薬学専門学校時代の敗戦までについてを述べ、その変容について解釈を加える。さらに全体を俯瞰し、西尾の地での多様な原体験や、戦時下にあつて純粹に生きたことが、茨木のり子の表現者としての〈核〉を形成したことについて述べてみたい。

なお、第一章から第三章では、それぞれの違いを明らかにするために、Aは小学校五年生の昭和十二年（一九三七年）に、Bは高等女学校三年生の昭和十六年（一九四一年）に、Cは専門学校三年生の昭和二十年（一九四五年）にスポットを当てた。これらはたまたま四年刻みとなつてゐるが、Aは日中戦争勃発の年、Bは太平洋戦争開戦の年、Cは日本の敗戦の年であり、歴史が動いた節目の年でもある。また本稿では、茨木の生年が一九二六年（大正十五年＝昭和元年）で彼女の数え年が昭和の年号と同じであつたことを生かして、敗戦までの年を和暦で表した。ただし年齢については、茨木の誕生日が六月十二日であつたことを踏まえて満年齢で記した。以下の傍線と「」内の補記は筆者によるものである。

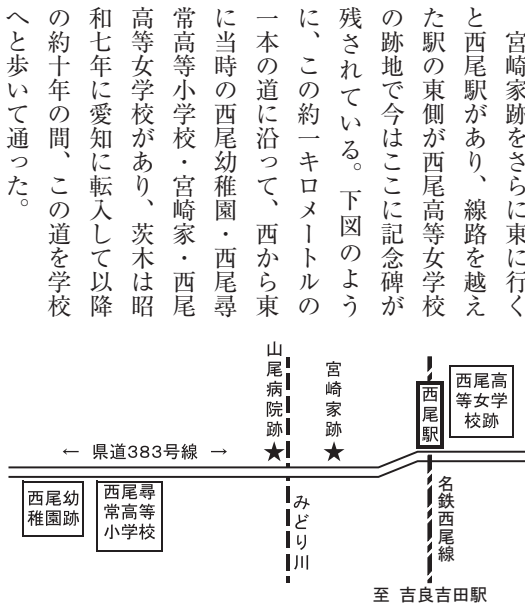
一 〈美しいもの〉と愛着の経験によつて育まれた「自分の幼い感受性」

―昭和十二年、西尾尋常高等小学校時代―

(1) 西尾の「のり子ロード」を歩いた十年

昭和七年に茨木のり子は一家で京都府から愛知県に転住し、西尾幼稚園に転入した。当時の西尾幼稚園があつたのは、現在の西尾市歴史公園がある場所であり、ここには東西に愛知県道三八三号線が走つてゐる。当時の幼

稚園の東隣には、今の西尾小学校と同じ場所に西尾尋常高等小学校があり、茨木は昭和八年四月から十四年三月までの六年間を自宅からこの小学校に通った。現在の県道を小学校から東に向けて緩やかに下ると、茨木の父洪氏が勤めていた山尾病院の跡があり、その東側の北浜川〔通称みどり川〕を越えると宮崎家の跡地がある。茨木はこの家で昭和十七年秋までを過ごした。



その縁深い通りを私は愛称として「のり子ロード」と呼んでいる。想像の力によって少女の姿を思い浮かべる

ことができる、そんなゆかりの道が西尾にはある。

(2) 二つの詩から読み取られる小学校時代の原体験

詩は言うまでもなく作者の創作物である。詩に描かれた世界をそのまま詩人の実体験に重ねて解釈するのは正しい方法ではない。茨木の詩についても、例えば少女が主人公として活躍する詩「女の子のマーチ」〔詩集『鎮魂歌』所収〕を読むと、第二連の「お医者さんのパパはいう」という所に茨木の父の存在と重なる部分が見られるが、父親を「パパ」と呼んでいる時点で架空の人間関係が表現されている。また同じ詩の第四連では「パン屋のおじさん」が「強くなったは女と靴下」と叫ぶが、これは戦後に流行したフレーズであり、明らかに茨木の実体験とは異なる世界が創出されている。

この〈詩に描かれた世界と作者の実体験とは異なる〉ということを前提とした上で、それでも『茨木のり子全詩集』を通読すると、少女期の茨木のり子の原体験や原風景が読み込まれていると理解されるものがいくつかあるのも事実である。茨木の少女期〔結婚前〕の、西尾に関わる原体験や原風景が読み取られる詩を『茨木のり子全詩集』に掲載されている順に示せば、「根府川の子」〔対話〕「準備する」〔汲む〕「抜く」〔首吊〕「癖」〔系図〕「寸志」〔ある存在〕「お休みどころ」〔夢で遊ぶ病〕「ひ

とり暮し」「秋の日に」「儀式」「麦藁帽子に」の十六が挙げられる。⁽⁸⁾

それらの中でも特に詩「癖」と「麦藁帽子に」は、小学校の何年生のいつ頃の出来事なのかまでが詩の中で明示されている。茨木の小学校時代を知る手がかりの一つとして以下に紹介する。

詩「麦藁帽子に」は「小学校に入ったばかりの頃」〔昭和八年の年度当初〕の一場面が次のように描かれている。

小学校に入ったばかりの頃／先生が最初に教えてくれた唄／それには振りもついていて／おでこを　びしゃびしゃ叩いたり／おもいきり足をあげたりするのだった／へんな唄／おかしな唄／突拍子もなく思いついて／ひとりで　うたう／／麦藁帽子に　トマトを入れてえ……／／だんだん愉快になってきて／それから日本史年表を繰ってみる／昭和八年――私の小学校一年生／小林多喜二が虐殺されていた！

詩の明るく陽気な雰囲気は、末尾二行で一気に暗転する。「昭和八年」に社会が既に暗い時代に入りつつあったことを暗示しているが、あどけない少女はそのことに気付いていない。

また詩「癖」では、小学校の「卒業のとき」の出来事

が次のように語られている。

むかし女のいじめっ子がいた／意地悪したりからかったり／髪ひっぱるやら　つねるやら／いいイッ！と白い歯を剥いた／／その子の前では立往生／さすがの私も閉口頓首／やな子ねえ　と想っていたのだが／卒業のとき小さな紙片を渡された／ワタシハアナタが好キダッタ／オ友達ニナリタカッタノ／たどたどしい字で書かれていて／〔略〕／遅かった菊ちゃん！　もう手も足も出ない／小学校出てすぐあなたは置屋の下地っ子

手に負えない「やな子」だと思っていた「女のいじめっ子」から、卒業の時に「オ友達ニナリタカッタノ」と書かれた紙切れを渡される。その切実さに、詩中の少女は深く心を動かされる。しかしそれはもう遅かった。「小学校出てすぐあなたは置屋の下地っ子」になるという。詩の中の少女はこの卒業時の経験を通して、人間や現実社会についての理解を深め、生きることの切なさを知る。

ここに挙げた二つの詩は、「小学校に入ったばかりの頃」の無邪気な少女が「卒業のとき」には敏感な感受性を備えていたという点で、少女の内的な成長を象徴的に表していると言える。

(3) 〈美しいもの〉と愛着の経験によって育まれた「自分の幼い感受性」

詩集のタイトルにも使われた「自分の感受性」という言葉は、茨木を語るうえでキーワードである。彼女の豊かな感受性が育まれたのは、(1)と(2)で触れた小学校時代に遡る。このことについては、本会誌一〇号の拙稿「茨木のり子の感受性を育んだもの」(以下「感受性論」とする)で述べたことがある。そこに記した内容は小学校時代の茨木のり子の内面を理解する基礎となるので、拙稿の論旨を以下に略述する。

少女期の茨木の豊かな感受性を育んだ要因の一つが、宝塚少女歌劇に象徴される〈美しいもの〉を自由な雰囲気の中で存分に体験できたことにあった。そしてもう一つの要因が「茨木に文化的な芽を植えてくれた実母と、文化に触れることを支えてくれた父の存在」(会誌一一〇号七九頁)であった。わけでも実母勝氏との深い絆が意味するものは大きい。小学校時代の茨木にとって〈美しいもの〉の経験と実母への愛着とは不可分のものであった。実際に小学校五年生の日記には、五か月のうちに宝塚少女歌劇を母と一緒に三回も楽しんでいたことが綴られていた。これら〈美しいもの〉を感じた体験は、母への愛着と重ね合わせられ、茨木の感受性を伸びやか

に育む基盤となったと言える。以上が拙稿の論旨であった。

小学校時代に育まれた豊かな感受性は、その後詩人となった茨木のり子にどのような影響を与えることになったのか。そのことを示しているのが、次に示すエッセイ「詩と演劇のあいだ」⁽⁹⁾である。この資料は、少女期に育まれた「素朴な自分の幼い感受性」が「人間としての正しい芽」と深く結び付いていたと自ら述べている点で、またそのことを知った時に「急激にしやべりたいことが押しよせてきた」と語っている点で極めて意義深いものだと言える。発表されたのは茨木が三十一歳の九月、第一詩集『対話』が刊行された二年後のことであった。またこれは、四十八歳で詩「自分の感受性くらい」を発表するより十七年も前のことである。

【資料①】 わが創造的要素、それは敗戦と同時に胎動をはじめた。始めは新聞への投書という形でそれが現れた。いわば投書夫人のハシリだったわけである。(略)

敗戦という激動期を迎えなかつたら私はけつして物を書いたりしなかつただろう。

文学ずきの伯父さんがいたわけではなく愛読の詩集があつたわけでもない。いまごろは、いくらか芸

術愛好癖の気があるつつましい奥さんになつていたことだろう。

幸か不幸か、権威と思つていたものの一切が、がら崩れ、大人たちのだらしなさをいやと言うほど見せつけられ、戦争をはじめた大将たちが甘つたるい反省の言辞を弄するのをみては小石も叫べ！となつてしまつたのである。

私は寅年だつたから千人針は実に沢山やらされた。⁽¹²⁾ その無意味さをうすうす気付きながら、そんなことを感じるのは罪悪だと、そういう感情を押えつけた。

人殺しに「聖戦」とはどこでどうツジツマが合うのかと疑問を持ちながらそれも日記に一行かきつけただけで、発展させるすべもなかつた。

ニユース映画で鉄かぶとに葉をピラピラつけた兵士たちが立つたり伏せたり進んだり、間の抜けた大砲がどこかで鳴つたり。退屈きわるまるしるものを、どうしても感激しなければならなかつたつらさ……。

そういういたつて素朴な自分の幼い感受性の方が実は人間としての正しい芽をらはんでいたのだと知つた時、急激にしゃべりたいことが押しよせてきた

のだ。

冒頭の一文「わが創造的要素、それは敗戦と同時に胎動をはじめた」からして、若書きの勇ましさが感じられる。この中で特に注目されるのは、千人針に代表される非合理的な因習に対して、当時の茨木が「その無意味さをうすうす気付きながら」も、自分の内にある罪悪感から「そういう感情を押えつけた」こと、さらに敗戦に至つて「そういういたつて素朴な自分の幼い感受性の方が実は人間としての正しい芽をらはんでいた」と気付いたことである。その認識が、後に発表される詩「自分の感受性くらい」のキーフレーズ「自分の感受性くらい／自分で守れ」の誕生へとつながつていったと考えてよい。そのことについては『二十歳のころ』⁽¹³⁾の中で、七十歳の茨木が「実は、この詩〔詩「自分の感受性くらい」の種子は戦争中にまでさかのぼるんです。〕と自ら語っている。「素朴な自分の幼い感受性」が「人間としての正しい芽」になつたという認識は、その後の茨木の思想の柱となつていく。

「詩と演劇のあいだ」に書かれている「千人針」の出来事は小学校時代のことではなく、日中戦争が泥沼化して戦時色が強まつた高等女学校時代以降のことを指していると考えられる。そのことは、エッセイ「はたちが敗

戦」の冒頭で「小学校五年生のとき」すなわち昭和十二年のことを「当時はまだお八つにも事欠かず、名古屋公演の宝塚も観にゆけて、『少女の友』という雑誌にうつりしていられた」と書かれていることからうかがわれる。茨木にとつての小学生時代は、〈美しいもの〉を味わった経験と実母との愛着の絆によつて「人間としての正しい芽」につながる豊かな感受性を育むことができた恵まれた時期であつた。

その一方で、愛する母を同じ「小学校五年生のとき」に結核で突然失つたことは、ある意味で少女の感受性を磨くことにもなつたと言える。一つの解釈として、昭和十二年十二月に実母が亡くなる喪失体験を、茨木の子供時代の終焉として見ることも可能である。小学校時代に育まれた豊かな感受性は、母という無条件に甘えられる心の支えを失つた後、高等女学校時代の軍国教育の荒波を受けて大きな変容を余儀なくされることになる。

次章では、西尾高等女学校に進学した茨木が、軍国教育と時代の影響をともに受けた姿に焦点を当てる。小学校の頃に経験した〈美しいもの〉の享受がはばかられるようになり、やがて〈美しいもの〉そのものが社会の中から消えていく。そのことに對する少女の違和感は時局の強い圧力によつて出口を失い、茨木の心の深層に沈

殿していくことになる。

二 意識の上での「軍国少女」への変容

―昭和十六年、西尾高等女学校時代―

(1) 「いっぱしの軍国少女になりおおせていた」

第一章では、主に小学校五年生の昭和十二年にスポットを当てて、茨木の小学校時代に「素朴な自分の幼い感受性」が育まれていたことについて述べた。本章ではそれから四年が経過した昭和十六年から翌年の高等女学校時代に、茨木が時代の流れの中でどのように変容していったのかを示したい。

この高等女学校時代の茨木については拙稿の感受性論の中で「高等女学校の時代以降の茨木は、当時の軍国主義や学校教育の影響を直に受けて、意識の上ではすっかり『軍国少女』になりきっていた。しかし同時に、自らの心の奥深いところで『この時代のあり方はおかしいんじゃないか』と感じる『疑問』も抑えがたく存在していた。」〔本会誌一一〇号七六頁〕と述べたので、これについては繰り返さない。ここでは、次節で述べる出来事に関連するので「はたちが敗戦」に描かれた分列行進の号令の場面〔六〇七頁〕を引用する。

【資料②】太平洋戦争に突入したとき、私は女学校

の三年生になっていた。全国にさがけて校服をモンペに改めた学校で、良妻賢母教育と、軍国主義教育とを一身に浴びていた。

退役将校が教官となつて分列行進の訓練があり、どうしたわけか全校の中から私が中隊長に選ばれて、号令と指揮をとらされたのだが、霜柱の立った大根畑に向つて、号令の特訓を何度受けたことか。

かしらァ……右イ／かしらァ……左イ／分列に前へ進め！／左に向きをかえて 進め！／大隊長殿に敬礼！ 直れ！

私の馬鹿声は凜凜とひびくようになり、つんざくような裂帛の気合が籠るようになった。そして全校四百人を一糸乱れず動かさせた。指導者の快感とはこういうものだろうか？ と思つたことを覚えてゐる。／「略」⁽¹⁵⁾ いっぱしの軍国少女になりおさせていたと思う。

茨木が西尾高等女学校の「三年生になっていた」のは昭和十六年のことであり、その年の十二月八日に日本は「太平洋戦争に突入」する。軍国教育に飲み込まれていた自分の姿を活写したものである。

昭和十六年から翌年にかけての茨木は、女学校の総代として軍国教育を先導する位置に立たされた。この時期

の茨木は、その敏感な感受性や強い責任感ゆえに、軍国主義の影響をともに受け、心の深奥に生じた時代への違和感や疑問を抑え込んで、意識の表層で軍国少女になりきつていたと言える。

(2) 詩「わたしが一番きれいだったとき」の原体験

以下のことは、本稿で初めて述べることである。

二〇一五年十二月に西尾市岩瀬文庫で開催された展覧会「詩人茨木のり子とふるさと西尾」の準備期間に、茨木のことを直接知る方々からの聞き取り調査が行われた。その一人、岩崎喜久子氏には二〇一五年一月二十五日に西尾市岩瀬文庫で西尾市教育委員会の学芸員と一緒に話を聞いた。岩崎氏は西尾幼稚園から西尾高等女学校までを茨木の一学年下の後輩として過ごし、同じ時間を共有した方である。前節の資料②で紹介した分列行進の号令について「のり子さんの号令はお聞きました。高須禮三郎さんという在郷軍人の人がみえて、その指示で私たちは横列に並んで行進しました。のりさんが最高学年になられた時にその軍列の先頭に立たれて、『前へっ』と大きな号令を立派にかけてみえました。』と語った。エッセイに登場する「大隊長殿」が誰かも含めて、明確に語られていたのが印象的であった。この内容は「詩人茨木のり子の会」会報第一二号（二〇一五年三月

発行」にも掲載された。以下は同じ日に聞き取った別の話題についての記録である。

【資料③】女学校から、出征の兵士を駅に見送りに行ったこともありました。駅の前にコの字型に並んでね。〔略〕体操の先生に男の先生と女の先生がみえて、年度の途中で男の先生が召集で学校から出て行かれて、戦死されました。その知らせを受けた時は、みんな泣いちゃいました。先生が出征される時、先生が将校のマントを着て、学校の前を行かれるところをみんなでお見送りしました。のり子さんが詩に書いてみえる通り、男の人はみんな挙手の礼をして行きました。詩の通りです。

聞き取り現場でこの話を耳にした時、最初は「詩の通りです」という言葉の意味がつかめなかった。しかしすぐに、これが詩「わたしが一番きれいだったとき」の一節「男たちは挙手の礼しか知らなくて／きれいな眼差だけを残し皆発っていった」を指していることに気付いて驚かされた。その詩の第三連までを引用する。

わたしが一番きれいだったとき／街々はがらがら崩れていつ／とんでもないところから／青空なんかが見えたりした／わたしが一番きれいだったとき／まわりの人達が沢山死んだ／工場で 海で 名も

ない島で／わたしはおしゃれのきつかけを落してしまった／わたしが一番きれいだったとき／だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかった／男たちは挙手の礼しか知らなくて／きれいな眼差だけを残し皆発っていった

この詩全体の中で、私が最も美しいと感じる場面が第三連の「男たちは挙手の礼しか知らなくて／きれいな眼差だけを残し皆発っていった」のフレーズであった。それと同じ場面が、茨木の西尾高等女学校時代に実際にあったものである。

本稿の第一章第二節で「茨木の少女期（結婚前）」の、西尾に関わる原体験や原風景が読み取られる詩」として私は十六の詩を挙げたが、その中に詩「わたしが一番きれいだったとき」は入っていない。その理由は、この詩の描写が茨木の個人的な経験を越えたものであり、人々が戦争によって受けた苦しみの象徴として茨木が選びとったイメージだと理解されたからである。実際にこの詩については「はたちが敗戦」の中でも、茨木自身が「同世代の女性たちから共感を寄せられ」（「一四頁」）と書いている。その認識が私にあつたために、岩崎氏の「詩の通りです」という言葉はとても新鮮に響いた。そして岩崎氏の言葉を受けて、改めて「はたちが敗戦」の先ほ

どの一文を読み直すと、その文が次のように書き始められていたことに気付く。「個人的な詩として書いたのに、思いもよらず同世代の女性たちから共感を寄せられた」と。詩「わたしが一番きれいだったとき」は本来、茨木の「個人的な詩」であつた。そのことは、詩の中で「まわりの人達が沢山死んだ／工場で」と表わされていることと、「はたちが敗戦」の中で「女学校時代の友人が女子挺身隊として徴用され、愛知県豊川の工場で爆撃死した」(「一〇頁」と語られていることが対応している点にも示されている。そうであるならば、岩崎氏の証言を手がかりにして「体操の先生」と茨木との関係を調べる価値はあると考えられた。

その後岩崎氏から「体操の先生」が西尾高等女学校の村越浩三教諭であることを確認した。さらに西尾高等女学校が所蔵する戦前の『通達簿』には、次のような記録が残されていた。⁽¹⁶⁾

【資料④】「以下は関係する行を抽出した」

昭和十四年度

左記ノ通り校務分擔ヲ命ス

一、學級擔任

一ノ二 村越教諭[㊦] 齋藤教諭[㊦]〔略〕

昭和十五年度校務分擔左記ノ如ク命ス[㊦]

一、學級担任

二ノ一 村越教諭[㊦] 稲垣久教諭[㊦]〔略〕

昭和十六年度

左記之通り校務擔當ヲ命ズ

一、學級担任

三ノ一 村越教諭 稲垣久教諭 〔略〕

〔昭和十七年度から村越教諭の記載はなくなる〕

また二〇一九年に刊行された『別冊太陽 茨木のり子自分の感受性くらゐ』⁽¹⁷⁾には西尾高等女学校時代の茨木自身の「通知簿」の写真が掲載されているが、その表紙には、在籍した学級が以下のように記されている。

【資料⑤】「〔通知簿〕の表紙」

通知簿

愛知県西尾高等女学校

氏名 宮崎園子

第一學年一組四九番

第二學年一組四六番

第三學年二組五〇番

第四學年 組 番

(組と番号は空欄)⁽¹⁸⁾

茨木が在籍した学年の西尾高等女学校は二学級編成で、各五十人のクラスであつた。村越教諭は昭和十四年度から茨木と同じ学年を持ち上がり、第一学年と第三学

年では茨木の隣の学級の担任をしていた。そして茨木の二年生の学級担任が村越教諭であつた。前掲した『別冊太陽』には「通知簿」の表紙の写真とともに、「第二学年出缺表」の写真が掲載されている。その主任印（学級担任印）には「村越」の氏名印が押されている。西尾高等学校が所蔵するその他の資料もあわせて村越教諭と茨木との関係をまとめると次のようになる。

村越浩三氏の西尾高等女学校への着任は昭和十三年五月で、茨木が入学した昭和十四年度は、隣のクラスの担任をしていた。そして茨木が二年生に上がった時に、彼女の二年一組の学級担任をした。翌年、茨木が三年生になった昭和十六年の夏に年度途中で応召した。この時、村越氏は満三十一歳であつた。そして昭和十八年に外地で戦死を遂げたと思われる。

高等女学校時代に、戦地に赴く「男たち」を見送ったことについては、茨木自身の経験として「はたちが敗戦」〔七頁〕で次のように語られている。

【資料⑥】女学校の隣が駅だったため、私たちはしょっちゅう列を組んで小旗をふり、出征兵士を見送るのも学校行事の一つだった

「女学校の隣が駅だった」とある通り、西尾高等女学校の西隣に西尾駅があり、駅前の広場では出征兵士の見

送りが行われた。

昭和十六年の夏、茨木はその年の春まで学級担任をしてくれた「男」が「拳手の礼」を残して「発つていった」姿を見た。その姿が、人一倍に鋭敏な感受性を持った少女の心の奥深くに刻まれたであろうことは想像に難くない。しかしその悲しみや切なさを表に出すことは時代が許さなかった。感傷に浸る自分の弱さを戒め、傷つきやすい感受性を抑え込んで軍国主義へと傾く自分を強化していったと思われる。前学級担任を戦地へ見送ったこの出来事を、私は茨木の原体験の一つに数えてよいと考えている。

このことに関して、茨木自身は資料⑥に書かれた以上のことを語ってはいない。私は拙稿「茨木のり子の新資料 物語『電話』¹⁹」の中で、実母を失った悲しみに関することとして「『自己を語る際』に自分と『距離』をとるスタイルが、自らの心の傷を生々しく描き出すことを止めてしまったと言えるかもしれない」と述べたが、そのことを担任が戦地に赴いた経験に当てはめてみてよいかもしれない。茨木の私的な心の痛みがそのままに公にされるのは、死後に刊行された詩集『歳月』の発表までなかったと言える。

戦争をうたった詩「わたしが一番きれいだったとき」

に、詩人の満十五歳の夏の具体的な経験を織り込んで読むと、新たな現実感を伴って詩の情景が浮かんでくる。改めて西尾の地において、茨木がその後につながる詩人としての礎を形成していったことに思いが至る。

昭和十六年の当時、日中戦争は出口が見えずに泥沼化し、戦時色はますます濃くなっていく。その年の夏に茨木は、春までの学級担任だった教員が出征する姿を目の当たりにした。そして同じ年の十二月に日本はアメリカとの戦争を始め、茨木は全校生徒のリーダーとして軍事教練の号令をかける。時代の影響をともに受けて、少女は軍国主義に染まっていた。しかしその心の奥底では、幼少期に育まれた「素朴な自分の幼い感受性」が「これはおかしい」という違和感も訴えていた。その「自分の感受性」に対する抑圧が強く働き続いていたのが茨木の高等女学校時代の深層心理の構造であったと言える。

茨木が西尾高等女学校の四年生となった昭和十七年秋に、父宮崎洪氏は吉良町（当時は幡豆郡吉田町）に宮崎医院を開業する⁽²⁰⁾。一家は吉良吉田駅の西に転居し、それ以降この吉良町が茨木のふるさととなる。彼女は高等女学校の残りの数か月を電車で西尾駅まで通った。そして父の意向に沿って、昭和十八年四月に東京の帝国女子医学薬学専門学校へ進学する。さらにその二年後の昭和二

十年四月十五日には、茨木が生活する東京の寄宿舎が空襲を受けて全焼する。その昭和二十年の春、満十八歳の茨木の内面は、どのような変容を遂げていたのか。またそれがふるさとでの経験を通してどのように変わっていったのか。そのことを次章で述べる。

三 死の意識からの再生と対話の希求

―昭和二十年、帝国女子医学薬学専門学校時代―

この時期の茨木については、本会誌の前号の拙稿「茨木のり子の原体験と詩『対話』の解釈」で詳述したので、ここでは〈小学校及び高等女学校時代からの変容〉と〈死の意識からの再生〉という二点に絞って略述する。

(1) 戦時下にあつて蝕まれていた内面―自殺への傾き―

小学校時代の茨木は実母とともに〈美しいもの〉を堪能し豊かな感受性を育むことができた。しかしその後、時代の息苦しさは不可逆的に強まっていく。大岡信との対談でも「やがて戦争が激しくなつて、宝塚も軍国ものばかり、それさえなくなつて私の学生時代なんというのば、もうほとんど何もなかった暗黒時代です。」と語っている。兵庫県の宝塚大劇場も昭和十九年三月に命令が下つて閉鎖された⁽²¹⁾。〈美しいもの〉はぜいたくであり敵だとする時代の暗さと自分自身に絶望し、茨木は専門学

校の時代には自殺を考えていた。高等女学校時代にはエネルギーに満ちた「軍国少女になりおおせていた」が、空襲警報と退避命令が繰り返される戦争末期の東京で茨木は身も心も疲弊し、生きる力は失われていた。寄宿舎では空襲警報の中でただ一人退避せず、自殺を思っ部屋に残っていたこともあったという。²⁴⁾

(2) 死からの再生―ふるさとの詩「対話」の原体験―

その茨木は、昭和二十年四月十五日の東京空襲で焼け出され、郷里の吉良町に帰った。そして詩「対話」に描かれているふるさとの原体験を通して、自分を蝕んでいた死の意識から解き放たれ、生きる意欲と対話への願いを獲得する。

以上が昭和二十年に至るまでの変容と、同年五月の原体験によって再生した内面の実相であった。茨木はその後、東京の専門学校から届いた動員令によって再び上京するが、ふるさとで体得した深い感動はその後の彼女の心を奥深くで支えていたと考えられる。

おわりに 詩人としての人格が形成された地、西尾

―「詩人茨木のり子を生み出した」戦争経験―

以上、第一章ではA西尾尋常高等小学校時代に豊かな感受性が育まれたことを、第二章ではB西尾高等女学校

時代に軍国少女へと変容しながら心の奥に敏感な感受性が抑圧されていたことを、さらに第三章ではC帝国女子医学薬学専門学校時代に自殺を思っていた茨木がふるさとの原体験を通して再生したことを、それぞれまとめた。茨木の少女期を、ABCの三期に分けてその内面の変容を時代の背景とともに明らかにし、これらを関係付けて茨木の少女期を全体としてとらえることができたと考えている。特にAからBへの変容は、敗戦後に「素朴な自分の幼い感受性の方が実は人間としての正しい芽を^{〔は〕}ら^{〔は〕}んでいた」という認識を獲得することに結び付き、それが詩「自分の感受性くらい」にもつながる茨木の思想の柱となったという点で大きな意味を持っている。また、Cにおいて詩「対話」の原体験を経験したことは、茨木が後に「『モノローグよりダイアローグを』という希求は一貫して持ち続けてきた」と語る深い意味を持つことになった。

本稿の結論として〈幼少期に育まれた豊かな感受性と、時代に流されて軍国少女となったことへの自省と、その他の多様な西尾時代の原体験が茨木のり子の詩人としての人格を形成し、彼女のその後の表現者としてのあり方を方向付けた〉とまとめたい。

この視点に立つと、本稿の第一章で引用した資料①の

「詩と演劇のあいだ」で「敗戦という激動期を迎えなかつたら私はけつして物を書いたりしなかつただろう」と語っていることは改めて注目される。戦中から戦後に至る異常な時代の中にあつて、軍国少女となつたこともひっくるめて、茨木が純粹に生きていたことが、その後の茨木の詩人としての〈核〉となつたと言つてよい。茨木のり子の戦時期の体験とその内面を知ることが、彼女の詩の理解を深めるためには不可欠であることを述べて結びとする。

昭和十二年に茨木が小学校五年生に上がったのは満十歳の時であり、敗戦の夏に彼女は十九歳になっていた。本稿で述べた少女期は、まさに彼女の十代のことである。その「十代の歲月」のことを、第一詩集『対話』の二番目に収められた詩「根府川の子」で次のようにうたっている。

沖に光る波のひとひら／ああそんかがやきに似た
／十代の歲月／風船のように消えた／無知で純粹で
徒勞だつた歲月／うしなわれたつた一つの子

茨木には自分の「たつた一つの子」が失われたことへのやるせない思いがあり、例えばそれが、詩「わたしが一番きれいだったとき」の「そんな馬鹿なことであるのか」という強い言葉となつて表れたと思われて

ならない。失われた自分の大切なものへの執着心は、自らの腕を奪い返した茨木童子に通じるものである。茨木のり子の原点を考える時に、ペンネームに「茨木」を選び取つたことと戦争によつて「たつた一つの子」を奪われた思いとを関係付けて読み取ることは可能かもしれない。

今回のNHKの番組制作を通して、筆者と〈対話〉をしながら茨木のり子についての考察を深めてくださったNHK名古屋放送局ディレクターの辻佐絵子氏に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

注

(1) 引用は『詩の力』（新潮文庫、二〇〇九年）の一五八頁。

(2) 放送日時は二〇二二年五月十三日（金）十九時三十分から。番組はNHK名古屋放送局が制作したもので「東海ドまんなか！」の一作であった。この番組はその後、六月三日（金）午前〇時からBS1で全国に放映された。

(3) 引用はNHKの協力依頼の文書による。

(4) 「少女」という言葉には「幼い女子」という語感があるが、茨木自身の用例では、例えば詩「汲む」の「少女の頃」は山本安英と出会つた二十一、二歳の頃を指している。茨木は結婚前の二十代前半までの自分を「少女」と表していた。

- (5) 現在の山尾病院は、一本南側の通り沿いにある。
- (6) これらの位置関係は、西尾市岩瀬文庫が発行した図録『茨木のり子没一〇周年 詩人茨木のり子とふるさと西尾』（二〇一五年）の三七頁の地図に詳しい。
- (7) 宮崎治編、花神社、二〇一〇年。以下、本稿での茨木の詩の引用は『茨木のり子全詩集』による。
- (8) 他にも、詩「答」は「十四歳の私」の原体験に基づくと思われるが、実母の故郷の山形のイメージを描いているのでここからは除いた。
- (9) 「茨木のり子の感受性を育んだもの―宝塚歌劇と『昭和十二年 小學生日記』から―」（『名古屋大学国語国文学』一〇号、二〇一七年十一月）。
- (10) 「詩と演劇のあいだ」は『詩学』二二巻第一号（一九五七年九月）の二三―二五頁に掲載されている。
- (11) 詩「自分の感受性くらい」の初出は一九七五年一月。
- (12) 茨木が生まれた大正十五年の干支は寅年に当たる。戦時中は寅年生まれの女性千人が一針ずつを縫った布が千人針として出征兵士の安泰を願って贈られた。
- (13) 「二十歳はたちのころ」（立花隆＋東京大学教養学部立花隆ゼミ、新潮社、一九九八年）の「茨木のり子にきく」の二二七頁。茨木がインタビューを受けたのは一九九六年十月六日。
- (14) エッセイ「はたが敗戦」の出版『ストッキングで歩くとき』（堀場清子編、たいまつ新書三六、たいまつ社、一九七八年）の五頁。以下、同じ「はたが敗戦」の引用については、本文中に括弧付きで出典のページ数を付記した。
- (15) 引用した「はたが敗戦」と同じ経験を詩「儀式」で「あはずかしい／分列行進の号令が大の上手 かしらアみぎい／大根畑に向って号令の練習／退役将校に仕込まれていた／十六歳のわたくしが」と自省的に語っている。
- (16) 『昭和九年十二月以降 通達簿』の簿冊による。
- (17) 『別冊太陽 茨木のり子 自分の感受性くらい』（平凡社、二〇一九年）の二六頁。
- (18) 実際には茨木は第四学年二組に在籍した。
- (19) 「茨木のり子の新資料 物語『電話』―母を亡くした小学生の心の支え―」（『名古屋大学国語国文学』一一三号、二〇二〇年十一月）。後の引用は六二頁。
- (20) 注（6）の図録の五六頁に掲載された当時の宮崎医院のチラシでは開院日は「昭和十七年十一月十六日」と記されている。
- (21) 「茨木のり子の原体験と詩『対話』の解釈―詩人が希求した〈対話の習性〉の意味―」（『名古屋大学国語国文学』一四号、二〇二一年十一月）。
- (22) 対談「美しい言葉を求めて」（『花神ブックス1 茨木のり子』花神社、一九八五年）の二一五頁。

(23) 宝塚少女歌劇が決戦非常措置要綱によって閉鎖令を受けたのは昭和十九年三月一日のことで、三月四日が最終公演となった(『宝塚歌劇五十年史 別冊』宝塚歌劇団、一九六四年、一七〇頁)。

(24) 注(13)と同じ『二十歳のころ』の一一九～一二〇頁。

(25) 吉野弘のエッセイ「第一詩集『対話』を中心に茨木さんの資質を考える」(『花神ブックス1 茨木のり子』花神社、一九八五年、一五四頁)からの引用。

(26) エッセイ「第一詩集を出した頃」の一節。出典は『花神ブックス1 茨木のり子』の七九頁。

(27) 「茨木」のペンネームについては『権』小史に「つけっぱなしにしていたラジオから謡曲の『茨木』が流れてきた。『ああ、これ、これ』と思って即座に決めた。」と書かれている。(『現代詩文庫20 茨木のり子詩集』思潮社、一九六九年、一〇二頁)。

(くまがい・まこと／愛知県立熱田高等学校校長)